

# 金澤北ロータリークラブ



写真：関 稔(会員)

■金沢 ■北郊 ■散策

## 慈雲寺

東山2丁目

雨宝山と号し日蓮宗に属する。天正五年(1577)尾張から利家に従って来た富田景政、今井彦右衛の二人が寺地を拝領、日祐を開基として建てられた。四代富田重政の時現在地に移転したと記される。富田家は代々加賀藩の剣道指南を務め富田流剣法を立てた。当山の摩利支天は、出陣の時甲に納めて守護神にしたという。

## 薬草の新しい見方

石川県保護協会々長 木村久吉氏



中国人にとって一種の理想である不老長寿。その不老長寿の材料である薬草は、我々の知識とかなりかけ離れたところでそれを称しているようです。

中国人にとっての健康法は、漢方でいう上薬です。これは命を長びかせるだけでなく、いつも健康的に過ごすための材料を言います。この上薬には、朝鮮人參

やハトムギ、甘草（醤油の中に入れる植物）又、オオバコの種などを言います。これに対して中薬といって精力をつける、いわゆる強精剤、又下薬と呼ばれる病気を治す薬があります。

最近我々の知っているところでは、“トリカブト”が下薬としてあげられます。下薬は作用が激しいものですから、毒は強いが、使いみちによっては非常に力を出すのに都合がよいのです。この毒性を押さえるための薬が考えられ、中国では色々な処方が出されています。その処方も我々は使いますが、そのほとんどは動物の材料で薬草はわずかです。

中国人の本来の生活の仕方は、自然のままに生きるというところがあります。この様な道教の思想から、彼らは自然の中からいろいろな薬を取る事を経験的に知っていたと思われまます。

明治以来の日本の薬学の使命は、薬のどの様な成分が、どの様な症状に効くかという事であったのですが、少し道を誤ってしまいました。それは植物から成分を取り出す事ばかり考え、それがどう効くかとの研究は昭和35年位からで、その後“生物活性”という動物実験にかける様になりました。

ところが現在、科学的に薬を調べる一方で、薬の事で迷信めいたものが広がっているのは不思議です。ニセ薬が横行し、効きもしないものが、効いたようにいわれている事です。薬について言うならば、正式な薬屋さんから、中の成分がどういう働きをするのか聞いた方が間違いありません。ところがまだまだ、漢方の上薬と呼ばれている中には、成分の分っていないものが沢山あるのです。

何が一番健康を害しているか、それは運動不足です。ストレスをなくしてゆっくり眠りますと長生が出きます。

(文責 坂口 幸市)



## 《詩吟》 歩々是道場

田中 廣 暁

習い始めの動機と言えば誠に不純、不謹慎の極みととでも言いましょうか、四十路間近になって何ア〜ンにも出来ない自分。…お酒の付き合いも苦手。真面目と言えば聞こえはいいけど、人畜無害、無味無臭、無芸大食？こんな自分ではたしていいのかなア〜と『四十にして迷う！？\*』。

古より習いごとは、6歳の6月6日から始め時間とお金、素質それに何と言っても一に努力、二に努力だが考えればどれもこれも無い無いづくしでますますピンチ！そこで一計。チームプレーよりも個人プレー。これから始めればおのずと老鏡……。個室（注・レストルームにあらず）にいながら練習可能で、丸暗記しても精々が一〜二分が限度、自己主張ができて余り恥も欠かずに…等々この年になると習う前からあれやこれやと己の能力の無さも忘れてナント贅沢（勝手）な注文ばかり。

そこで今流に「アン・ぼん・タン」？ではなく「安・近・短」と決めいよいよ師匠探し、こんな都合のいい我がまを聞いて下さるその道の師匠に出会いたいと…。でも縁とは不思議なもので寛大な師匠と出会って〜ン年、しかし後で気が付く「アン・〇△・タン」、三弦より二弦、二弦より一弦、単純なことほど奥深く、二分間で人生の機微を表現するは至難のこと七転八起の連続、ヤッパリ後悔先に立たずか…………。

\*演歌は三分間の人生ドラマ、詩吟は二分間の人生訓\*

薄ッペラな己がほんの少しでも厚みを増すことができれば成就とばかりに五周遅れのトップランナー、それすら気づかずに一心不乱……合掌！

## 秋の同伴夜間例会

生僧の時雨模様の10月30日、婦人同伴例会が開かれた。

当日は金沢大学落語研究会2人の女性メンバー嵯峨ノ家芸夢さん京妓さんの古典落語で一時楽しんだ。

出し物は上方桂枝雀の「日和違い」「ふたなり」を熱演した。



会場でのヒソヒソ話

Aさん「あまりおもしろくないね」

Bさん「始めて2年目やさかい、しゃーないやろ」

Aさん「どこで笑ったらいいやろ」

Bさん「二人が帰ったあとで笑ったらいい」

